

芭蕉講座

第二卷 表

現



芭蕉講座 第二卷

表 現

昭和五七年二月二〇日 初版發行

定 価 三〇〇〇円

編 者 芭蕉講座編集部

発行者 山 崎 誠

〒101 東京都千代田区神田神保町一―三九

発行所 有精堂出版株式会社

電 話 (〇三) 二九一一―二五二一

振 替 東京九―四〇六八四

刊行のことば

芭蕉は、いうまでもなく、日本文学の一つの高峰であります。多くの文学者が芭蕉に魅せられ、芭蕉のことを語り、研究してきました。また俳人たちにとって、芭蕉が高い目標であることは、昔も今も変わりありません。芭蕉に関する講座類も、これまでにいくつものものがあります。しかし、近年の芭蕉研究の進展にはいちじるしいものがあり、この時期に講座の形によって批評や研究を展望し、問題点を確認し、作品に新たな接近を試みることは意義のあることと思います。

このたび小社が刊行する本講座は、その意味において研究の一時期を画するばかりでなく、日本古典文学普及のためにも意味のある企画であると信じております。そのために、本講座では、五巻の分量を投じ、真に芭蕉の研究を推進しておられる大家、中堅の方々に御執筆をお願いして、万全の編集となるよう配慮しました。

小社といたしましては、本講座が、従前の芭蕉研究の総合的結集であり、同時にそれらへの批判や反省をも含んだものとして、次代の芭蕉研究の基礎となり、芭蕉研究の進展と転換を促すものでありたいと望んでいる次第であります。小社の意をご推察の上、この講座をご支援下さいますようお願いいたします。

有精堂出版株式会社

『芭蕉講座』編集部

目次

▼蕉風の推移

成立まで 松尾靖秋

I

達成 山下一海

31

展開 米谷巖

62

▼作品の概観

発句 永野仁

93

連句 阿部正美

119

俳文 赤羽学

146

紀行文・日記 西村真砂子

172

▼俳論

さび・しほり・ほそみ 復本一郎 204

にほひ・うつり・ひびき 八亀師勝 230

かるみ 富山奏 256

風雅の誠・不易流行 伊藤博之 274

虚実の論 関森勝夫 292

蕉風の推移 成立まで

松 尾 靖 秋

一 俳諧の連歌——宗鑑と守武——

本稿においては、蕉風が成立するまでの俳風の変化、展開とその背景について考察するわけで、そのためには、いわゆる俳諧の発生からその後の変遷について展望する必要がある。

俳諧の発生はふつう室町時代末期のこととされているが、もちろんその明確な年代を決定することはきわめて困難である。もともと俳諧の前史として考えられる連歌は、既に平安末期に発生した。室町時代に入り、それもとくに中期以降になると、南北朝の争乱をはじめとして、あわただしい時代となり、武士は戦いに追われ、殺伐な気分が横溢するようになる。しかしその反面かれらの間にも文学的なものに対する要求がたかまって、そうした気運に応えたものの一つが連歌であった、と考えられる。それは当時のかれらの気分にアッピールして急速な流行をみたようである。そうした要求のあるところに生まれたのが連歌師である。名のある連歌師、宗匠になると、上級の武士の間に甚だ厚遇を

受けたようで、戦国時代といえども、一流の連歌師になると国境をこえたふるまいができたといわれる。たとえば「宗長手記」によると、

河井駿河守の迎ののり物、もる山まで来り、かがみの山をこえ、翌日連歌あり。

とか、

鈴鹿山の坂の下まで乗物、以下同行衆馬、(中略)かねてやつたへをかれけむ、酒肴山中の興忘れがたし、所々をくりの人出て、関々とがむるものなし。云々

というような記事が見られる。宗祇における上杉氏や大内氏、兼裁における大内氏などのように、有力な武家をパトロンにしたり、心敬のように宗匠として貴顕の席にもしばしば参会する者もあった。准大臣中院通淳を父とする肖柏や、宗砌や宗伊のように武門の出で連歌師となった者もあったところをみると、そのころの連歌師の社会的地位や、生活の一面を知ることができる。

こうした連歌の盛行に対して、その余興としておかしきをもつばら追求しようとする俳諧の連歌が流行するようになった。それはあくまでも知的な言語遊戯を内容とし、即興的に詠みすてにされ、あたかも能に対する狂言のような性格を有するものであった。しかも連歌にはかなりの教養が要求されたけれども、この方はさして教養を必要とせず、日常的な生活をおもしろく、おかしき詠めばよいというわけで、中下層の階級に多く受け容れられるようになった。優にしてみやびやかな連歌の嚴肅さから解放されようとする人々の要求に応えたものである。そのころようやく動きはじめた民衆の文化的要求を反映したものであったとも考えられよう。いいかえれば、和歌の伝統に生きようとする連歌が上流の階層に属する人々に受けつがれていったのに対して、俳諧の連歌は、あくまでも庶民的な文

芸の様式として、次第に成長の途をたどっていったわけである。室町時代も末期になると、このような俳諧の連歌はますます隆盛となり、その間にあって文字通りその独立に大きな役割を果たしたのが山崎宗鑑であり、また荒木田守武であった。連歌から俳諧連歌への過渡期の人物として里村昌琢を重視する説もあるが、ここでは通説に従って前の二者についてふれることとする。

宗鑑の出自その他については諸説があり、必ずしも定説をみないが、彼は近江の人で、支那弥三郎範重といい、延徳元年（一四六九）將軍足利義尚が佐々木高頼を攻めた折、その軍に従ったが、義尚が没したのを機に武門を辞したとも、摂津尼崎に逃れ剃髪したとも伝えられる。のち、山崎に移り、天王山下の竹林中に対月庵を結び、山崎の宗鑑と称された。山崎の辺は菜種油の産地であったので、竹を切って油筒を作り、口を糊し、風狂の生活を送ったとも、いわゆる宗鑑流として伝わる筆法で古典類の筆写を行い、生計をたてたともいう。連歌に深い造詣がありながら願門に出入することもなく、連歌の煩瑣な作法式目の束縛を嫌って、自由奔放を主とする俳諧の連歌に傾倒し、『犬筑波集』を編んだ。晩年は讃岐観音寺の興昌寺内に一夜庵を結び、同所で生涯を閉じたという。いま国鉄山崎駅の近くに宗鑑井戸というのが遺されている。

『犬筑波集』はいうまでもなく宗祇の『新撰菟玖波集』に対して名付けられたもので、それは連歌の貴族趣味に対する反逆であり、伝統の破壊を意味するものであった。「犬」というのは「犬侍」などのように、卑賤を意味する言葉で、いちおう宗祇の撰集に対する謙遜の意味ではあるが、それはあきらかに雅に対する俗であり、自己主張の証しと見ることもできる。民衆文学の誕生ということにもなるであろう。同書の巻頭には、

かすみのころもすそはぬれけり

という前句に対して、

さを姫のはるたちながらしとをして

とある。「佐保姫」は春の女神で、「霞の衣」に対する付合であるが、前句のかもしれない出す和歌的な雰囲気に対して、立小便をするという、意表をついた句で読者を哄笑させるのである。また、

きりたくもありきりたくもなし

に対して、

ぬす人をとらへてみればわが子なり

さやかなる月をかくせるはなのえだ

こゝろよきまと矢のすこし長きをば

の三句が付けてある。「さやかなる」と「こゝろよき」の両句には機智のはたらきがあり、すでに俳諧の性格が認められるが、「ぬす人を」の句は、後に川柳にもその着想が用いられているように、すでに庶民的な感情の盛りこまれていることが認められる。また、発句にも、

春さむきとし

にがくしいつまで嵐ふきのたう

とある。露のとうはにが味のするもので、「にがにがし」（いとわしい）とかけてある。「嵐の吹く」と「ふき」とが掛詞となっていることはいうまでもない。また、

二月十五夜嵐はげしければ

はる風に釈迦むり／＼の軒端かな

というのがある。「釈迦牟尼」の「むに」を「むり／＼」に通わせ、軒端に吹きつける風の音の「めり／＼」を利かせた機智である。これらの句にも、言語機智によるおかしさとともに、庶民的な感じ方や受けとり方を知ることができる。しかもこの兩句に見える詞書の役割を考えてみる必要がある。ふつうには、詞書は、和歌にしても俳句にしても、読者に歌や句の内容をよりよく理解させるための、解説的な役割を果たすものであるが、この句の場合には、詞書からわれわれの受けとる予備知識は、句によってひっくり返されるのである。しかしそれがまたこれらの句にとっては生命であり、句のおもしろさ、あるいはおかしみを形づくっているのである。『大筑波集』にはこうした宗鑑の撰句の態度が見られるわけであるが、それはまた宗鑑的な俳諧の性格を誇示したものであろう。その他、縁語や掛詞、あるいは同音異義の語を用いるというような方法で、もっぱらおかしみが追求されているのである。しかし、こうした宗鑑の通俗性や卑俗趣味に対して、やや異なる立場に立ったのが荒木田守武である。

守武は宗鑑とはほとんど同時代の、伊勢内宮に古くから仕えた世襲の神官荒木田氏の正系にあたる人物である。文明五年（四四三）出生、翌六年二歳で従五位下に任ぜられ、文明十九年（四六七）十禰宜となり、六十九歳の天文十年（一五四）に一禰宜に進み、蘭田長官と呼ばれた。一般に神社では祈禱連歌が興行されたり、連歌との縁は深いが、伊勢も元来連歌の盛んなところであり、彼もはやく宗祇や宗長、また兼裁や肖柏など、有力な連歌師について連歌を学んだ。大永五年（一五二五）五十三歳のとき、彼は有名な『世中百首』をつくっている。世人を教誡するための一種の道歌である。

世の中の親に孝ある人はただ何につけても頼もしきかな

をはじめとして、すべて「世の中」という言葉を詠みこんだ歌で、「伊勢論語」ともてはやされたというが、おのずから彼の人物をも示すもので、それはそのまま彼の俳諧観の上にもあらわれている。すなわち『守武千句』のあとがきによると、

さて、はいかいとて、みだりにし、わらはせんと斗はいかん。花実をそなへ、風流にして、しかも一句たゞしく、さておかしくあらんやうに、世々の好士かうじのをしへ也。

といい、また

本連歌に露かはるべからず。大事ならん歟。

ともいつている。彼は宗鑑のように、卑俗に墮しようと思せず、穩健な作風を俳諧に示そうとしたものであり、俳諧の文芸意識にめざめていることを示すとともに、連歌と対等の位置を認めようとしたものであることがわかる。要するに彼は、俳諧のおかしみを卑俗な世界に求めようとはせず、別の世界を意図していたわけで、それは当然ながら彼の作品にもあらわれている。

飛梅やかろくしくも神の春

われもくのからすうぐひす

のどかなる風ふくろうに山見えて

目もとすさまじ月のこるかげ

『守武千句』の巻頭の四句である。発句の「飛梅」は、菅原道真が太宰府に左遷されたとき、そのあとを慕って京都の本邸から九州まで一夜のうちに飛んだという梅で、道真が京都を発つとき「東風

ふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ」と詠んだ梅である。「かるくし」は飛ぶことが軽々しいのであり、更に縁語の「紙」につながり、「紙」から同音の「神」に移ってゆく、という仕立てかたである。太宰府天満宮の社頭の春をことほいだものであることはいうまでもない。脇は、社頭に集まる群衆の意を含めて、烏や鶯までも春うららかな社前に集まってくる、との意である。「梅」と「鶯」はもちろん縁語である。そして、ここで注意すべきは「烏」である。後年芭蕉が俳諧の本質について語った有名な言葉に、

（先師）又いはく、春雨の柳は全体連歌也。田にし取鳥は全く俳諧也。云々

（白さうし）

というのがある。のちに貞門では連歌と俳諧との相違は俳言の有無によると説いているが、守武にもそうした意識があったかもしれない。次の「ふくろう」も俳言である。

第三句はいうまでもなく春風胎蕩とした雰囲気を詠んでいるが、「風ふく」から「ふくろう」にかけ、「烏」「鶯」から「ふくろう」へのおかしみをねらったものであり、第四句は前句を明けがたの景と見たててよんだもので、「目もとすさまじ」は、昼中は目の見えない梟が残月を見すえている姿で、その意外さに俳諧としての性格が感じられ、また残月の蕭条とした景をも彷彿とさせるものがある。ここに見られる作風には、次に登場する貞門の性格に通ずるものがあり、さきの宗鑑の作風がのちの談林に通ずるものがあるのと対照的である。俳諧の揺籃期における守武の役割はまことに大きかった。

二 貞門の俳風

徳川家康が江戸に幕府を開いたのは慶長八年（一六〇三）のことだが、彼は身分制度・貨幣制度・教育制度の、世にいわゆる三大政策を打ち出した。彼は「武を以て天下は取るべし、武を以て天下は治むべからず」といったという。そうした文治政策に立つて、特に教育制度の確立と普及ということに意を用いた家康の経綸は高く評価されてよい。寺子屋や藩学の整備と充実とがそれである。そこではいわゆる「読み書きそろばん」、国語と算数と、道德教育とが基本とされたが、その結果、一般庶民に至るまで文字を知り、理解するようになる。しかも近世に入つて、次第に盛んになった印刷がそうしたことに拍車をかけることとなった。本格的な活版印刷の技術が日本に将来されたのは十六世紀末のこととされているが、慶長十九年（一六四四）に將軍職を二代秀忠に譲つて駿府に隠退した家康が、金地院崇伝や林羅山に命じて銅活字による本格的な刊行事業を開始し、更にこれを真似て木活字による印刷が行われ、寛永末年ごろからもっぱら木版による印刷が盛んになると、仮名あるいは仮名交り文の印刷がますます盛行するようになる。そうした状況にふさわしい文学の様式が、当然生みだされるようになる。散文における仮名草子がそれであり、韻文における貞門の俳諧がそれである。しかも俳諧はその形式も簡易であるために、大衆は創作することにおもしろさを覚え、それは急速に大衆に受け入れられることとなった。そうした時代を中心にあつたのが松永貞徳である。

貞徳は摂津高槻城主入江盛重の曾孫にあたる人物で、父の代から松永氏を名乗った。父永種は連歌師であり、文雅のたしなみ深く、その関係で既に少年のころから、紹巴に連歌を、ついで幽斎からは

和歌や歌学を学んだ。彼みずから『戴恩記』に「師の数五十余人」と記しているように、多くの師から和歌や歌学、儒学、連歌、神道、有職故実など実に多方面にわたって学び、のちの彼の活動の基礎が培われた。三十歳のころから京都にあって歌人、歌学者として私塾を中心に庶民の教育に従事するとともに、歌人としても活躍し、『歌林樸樸』や『和歌宝樹』などを編して歌学の興隆につとめ、また『万葉集』や『源氏物語』の研究にも手をそめるところがあった。他方彼は慶長十年（一六〇五）ごろ、三十四、五歳のころから俳諧にも手をつけ、寛永二年（一六二五）には京都の妙満寺ではじめて俳諧の文台を立て百韻を興行した。俳諧はあくまでも連歌の余興であり余技であるという従来の見解に対して、彼は俳諧は和歌や連歌に見る道程であるとの考えに立っていた。そしてその表現には、連歌における雅言に対して俗語や漢語、俚諺や流行語を意味する俳言が用いられるべきであると主張した。彼の自著で式目書の『御傘』（慶安四年（一六五二）刊）によれば、

抑はじめは俳諧と連歌のわいだめなし。其の中よりやさしき詞のみをつづけて連歌といひ俗言を嫌はず作する句を俳諧といふなり。

といっている。彼のこうした行き方は、まことに大衆の耳目に入りやすかった。貞門の作風が急速度に支持者の数を増していった要因はそこにあった。貞徳の門下松江重頼の手によって寛永十年（一六三三）『犬子集』が刊行され、更に、同年『発句帳』が立圃の手により、十三年には西武の『久流留』や立圃の『はなひ草』が出て、貞門の俳諧が確立した。中でも『犬子集』は京・堺・大坂・伊勢・因幡というように各地にわたって百七十余人の作者が登場し、発句千六百余、付句一千を数える。ところが、貞徳がかねて批点を乞われた多くの句稿の中から秀逸なものを選んで刊行しようと意図し、それを門

下の良徳が編して刊行した慶安四年（一六五〇）刊の『崑山集』になると、句数も八千を数え、また『崑山集』の後集の意味をもって貞室によって撰せられた明暦二年（一六五六）刊の『玉海集』では全国の作者六百五十余人、発句二千六百余、付句五百八十余を数え、更にそれから十余年後に出た北村湖春編の『続山の井』（寛文七年（一六六六）刊）では、作者九百六十余人、四十八カ国に及び、句数も五千三十余というように、貞門の勢力は圧倒的なものとなった。貞門のこうした盛大ぶりは寛永から寛文に至る三十余年間のことであつた。

さて、『犬子集』によると、貞徳の句として、

霞さへまだらにたつやとらの年

が見える。今年は寅の年だから霞もまだらに見える、というのである。また、

花よりも団子やありて帰雁かへもかり

は、「花より団子」という俗諺をふまえたものであり、

しほるゝは何かあんずの花の色

は、「杏子」と「案ず」をかけたものである。また、貞徳の俳諧観は、彼の『新增犬筑波集』（寛永二十年（一六四三）刊）に見ることができる。当世風俳諧の模範を示そうとしたもので、特に上巻にあたる「あぶらかす」には『犬筑波集』の句をかりて実作によって作風が具体的に示されている。まず巻頭に、

霞の衣すそはぬれけり

天人やあまくだるらし春の海

がある。付句が貞徳の句で、「天人」「あまくだる」が俳言である。『犬筑波集』で

さを姫のはるたちながらしとをして

と詠んだ宗鑑の卑俗さに比べると、ここでは卑俗さから身をかわして、むしろ連歌的な趣味のものにたちかえっている。あるいはまた、『犬筑波』に

五条わたりにたてる尼ごぜ

ゆふがほの花のぼうしをうちかづき

の句が見える。もちろん『源氏物語』によって、「五条わたり」に「夕顔」をつけたものであるが、ただしここでは辻君の意にとつてある。ところが、この前句に対しても、「あぶらかす」では、

五条あたりにたてる尼御前

涼みけりこれ惟光が母なれや

という付句をはじめとして、

扇かふ人の行衛や御影堂

はすの糸で袈裟やを（お）らふと思ふらん

などの付句が見られる。真面目な貞徳の俳風を伺うことができるとともに、初心者の手引としてきわめて有用であった。また、『犬子集』によると、

五条あたりに多きあき家

夕顔の地子（ちし）にさいそく付られて

の付句が見られる。「五条」に対する「夕顔」の連想はもちろん『源氏物語』によるものであり、「あき家」に対する「地子」（土地税）は、あき家でも税金だけはとられるという、そのころの制度をふ